昭和四年三月十五日（第三種郵便物認可）
令和六年五月一日印刷納本
令和六年五月五日発行

（毎月一回五日発行）　第九十七巻　第五号　第一一四四号

書壇

吉田苞竹創刊

令和六年（２０２４年）
五月号

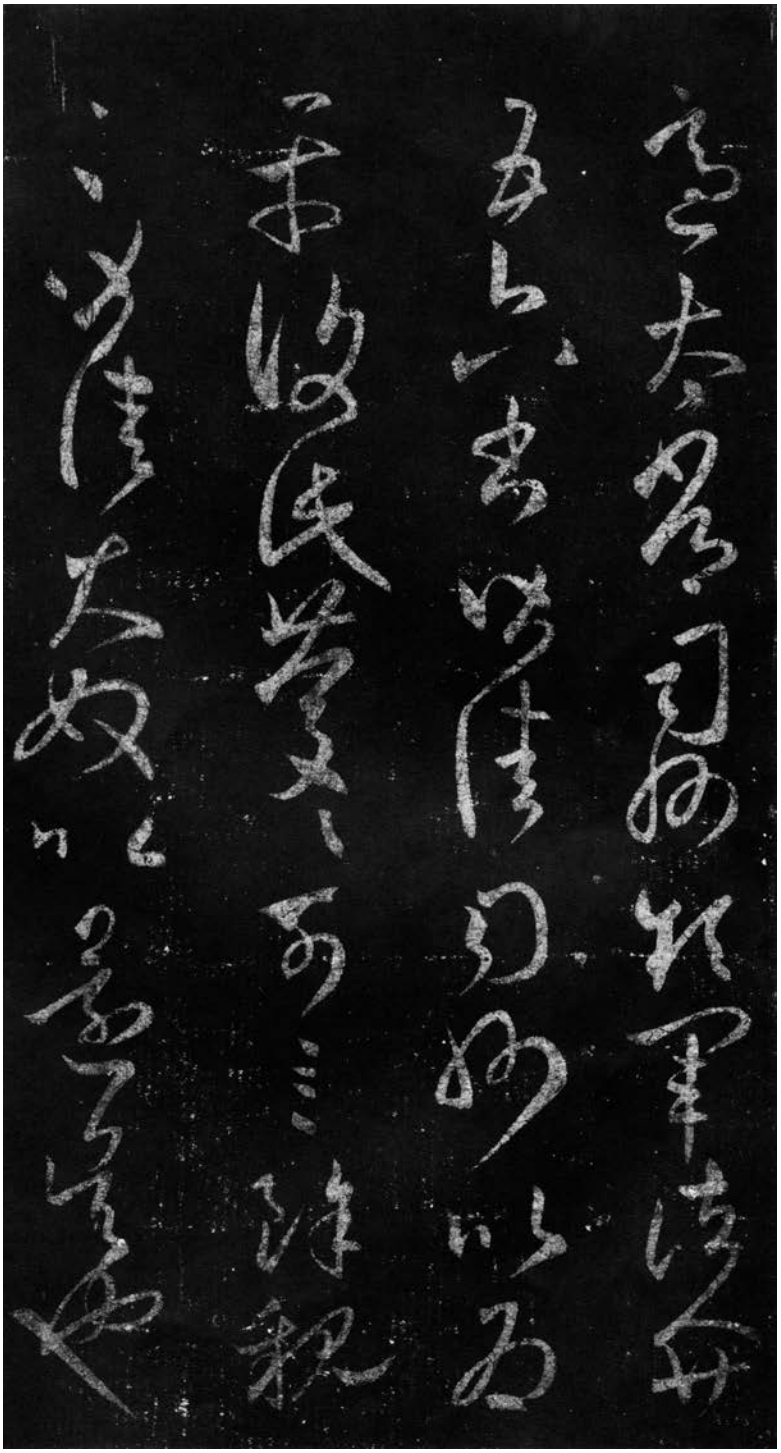
公益財団法人
書壇院

公益財団法人書壇院は、書道の研究、教育及び普及に関する事業を行い、書道芸術の高揚と精神の修養、人格の陶冶を図ることを目的としています。

古典研究

王羲之書―太常帖―

（二玄社　中国法書選⑬ P.4）



適太常司州領軍諸人。廿五六書皆佳。司州以爲平復。此慶々可言。餘親々皆佳。大奴以還吳也。

（漢字臨書規定＝8頁）

課題

半切＝適太より皆佳まで（三十一字）

半紙＝司州以爲平復（六字）

臨書は良薬

中井言玉（なかい げんぎょく）

私共書を志す者にとって長い書道人生を歩む間にはスランプになる時期が必ずあると思います。スランプになると私は、迷い、書けないと言うより書く意欲が湧かずイライラ困惑し切ってしまいます。試行錯誤の末、私がたどり着いたのは、なるべく筆は離さず好きな古典を淡淡と書き続けるよう努力することです。

―好きな古典と言えば―私が初めて訪中したのは今から四十数年も前の若かりし頃、全日本書道連盟主催の「第二回中国書道研究会訪中団」に参加させて頂きました。その折、団長の故稲村雲洞先生に薦められて購入したのが後漢の西狭頌でした。その特別な思いもあり好きな古典の上位です。西狭頌は文字が、はっきりとして分かりやすく、字形は四角形に近く肥痩の変化も余りありません。決してスマートな隷書ではないと思いましたが年月が経つにつれ、その素朴な味と堂々と構える大らかさに安心感と温かみを感じるようになり徐徐に私の心に響いてきた隷書です。半紙に六文字ずつ、〝取り敢えずスタート〟させ無理をせず三、四日かけ約四百字近い碑文を全臨し終えた頃満ち足り、ま、いいかと、心は穏やかになっています。最後の頁に小さく年月を書いておきます。この原稿を書きつつ数えてみると二十五回でした。全部困った時に書き始めた訳ではありませんが何回かは助けられています。

私にとって好きな古典の臨書は、スランプ解消の良薬です。

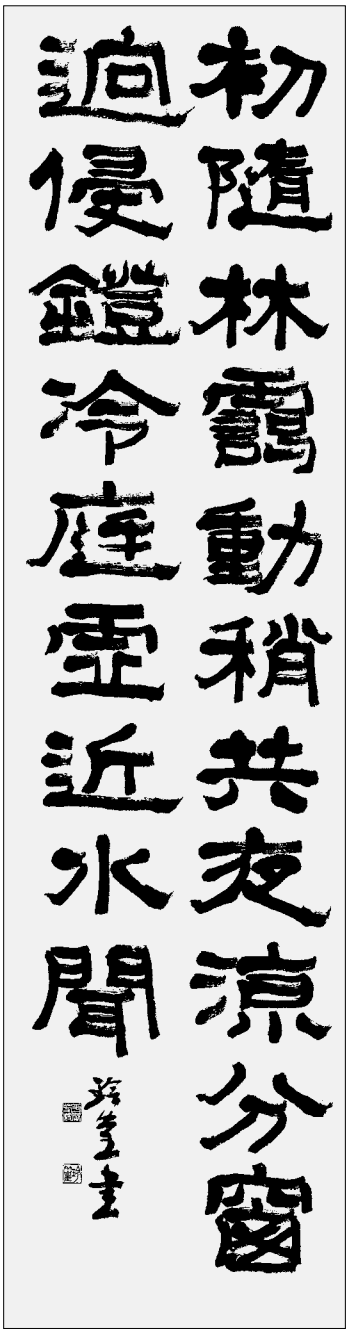
令和六年 書壇 五月号 目次

表紙＝書壇院蔵 旧拓集字聖教序 題字 集鄭道昭書
古典研究……中井言玉…1
巻頭言……表2
同人参考手本 平岡玲篁・本多岱山…2
祥流・春淵・軒雨・裕子
小林赤瑛・細田秋僊

競書課題
漢字規定……横山菁絢…5
かな規定……佐藤節子…6
南画規定……大久保楓紅…7
漢字臨書規定 玉井菁雪・桑山戯魚…8
かな臨書規定 星野静代・松原静香…9
日本文……中井言玉・鈴木啓佳…10
篆刻入門……鈴木青雨…11
各部昇位試験規定……12
第七十五回毎日書道展作品募集……13
第五十八回高野山競書大会案内……16
第一三九回審査会員遊苑……18

第一一四四回選書
写真・批評……20
成績発表……33
お知らせ……18・19
六月五日締切課題予告……48
書壇院日記……51
バーコード券申込書……52
応募規定・競書出品方法……53
書壇院ギャラリー案内第一一九回展……表3
書画の鑑賞……高橋彩綏…表4

平岡玲篁書

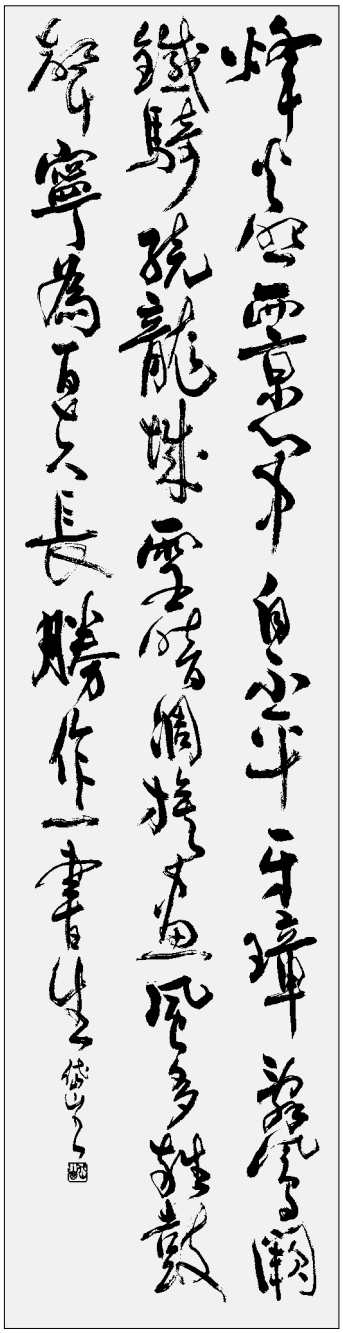


―李商隠詩―

初隨林靄動稍共夜涼分窗迴侵燈冷庭虛近水聞

（墨場必携詠物詩選）

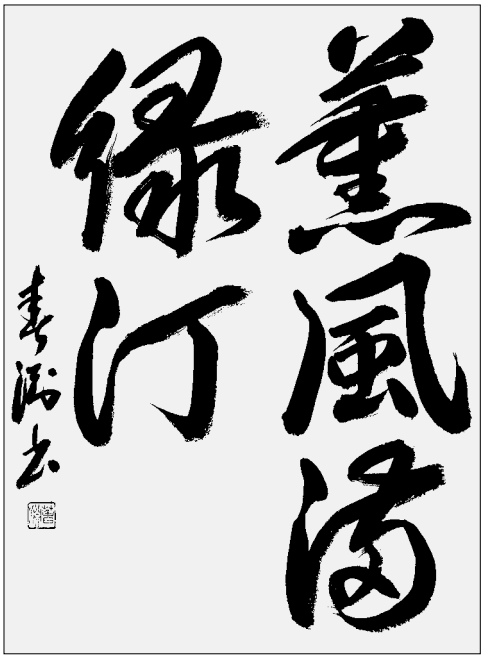
本多岱山書



―楊炯詩―

烽火照西京心中自不平牙璋辭鳳闕鐵騎繞龍城雪暗凋旗畫風多雜鼓聲寧爲百夫長勝作一書生

（唐詩選通解）



薫風満ツ緑汀ニ。

趙師秀句

小林春淵書

鳥聲幽谷ノ樹。山影夕陽ノ村。

汪藻句

御子柴祥流書

竹の子や　安万氏那可あまりてなどか　人の能庭

大江丸の句

渡部裕子書

霞ハ蒸ス千樹ノ紅桃。

六言句

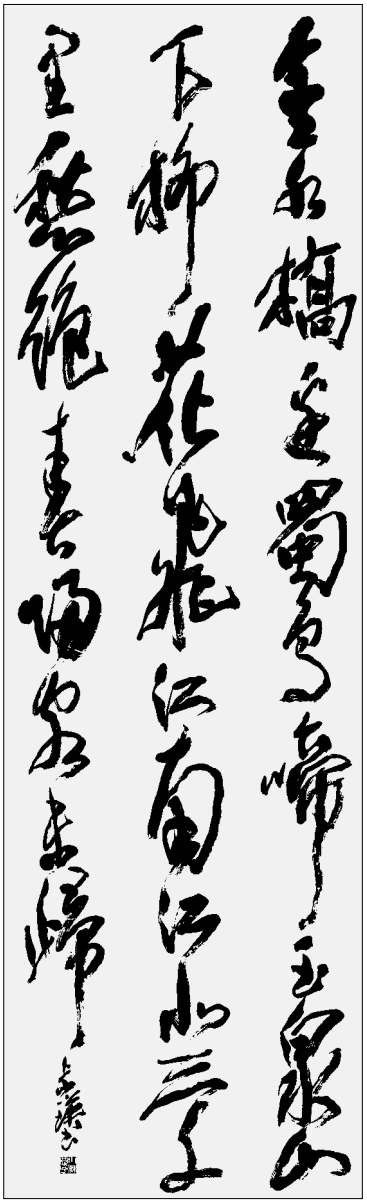
西村軒雨書

書壇院展・毎日展公募と同サイズです　―ご活用ください―

同　人　参　考　手　本

2尺×6尺額用

小林赤瑛書



―張羽詩―

金水橋邊蜀鳥啼。玉泉山下柳花飛。江南江北三千里。愁絶春歸客未歸。

（墨場必携明詩選）

用紙　紅星牌棉料単宣
筆　唐筆・長鋒3号

細田秋僊書

―張詠句―

幾為典衣留遠客。半來欹枕看閑雲。

（翰墨自在）

用紙　紅星牌棉連
筆　和筆・中鋒

五月八日締切（行書）

漢字規定

半紙縦書

上位・準上位課題

莫賣盧龍塞

送別崔著作東征　陳子昂

崔著作が東征するを送別す　陳子昂

金天方肅殺　白露始専征

金天方に肅殺　白露始めて専征す

王師非樂戰　之子愼佳兵

王師戰を樂むに非ず　之子兵を佳むことを愼め

海氣侵南部　邊風掃北平

海氣南部を侵し　邊風北平を掃ふ

莫賣盧龍塞

盧龍の塞を賣り

歸邀麟閣名

歸つて麟閣の名を邀むること莫かれ

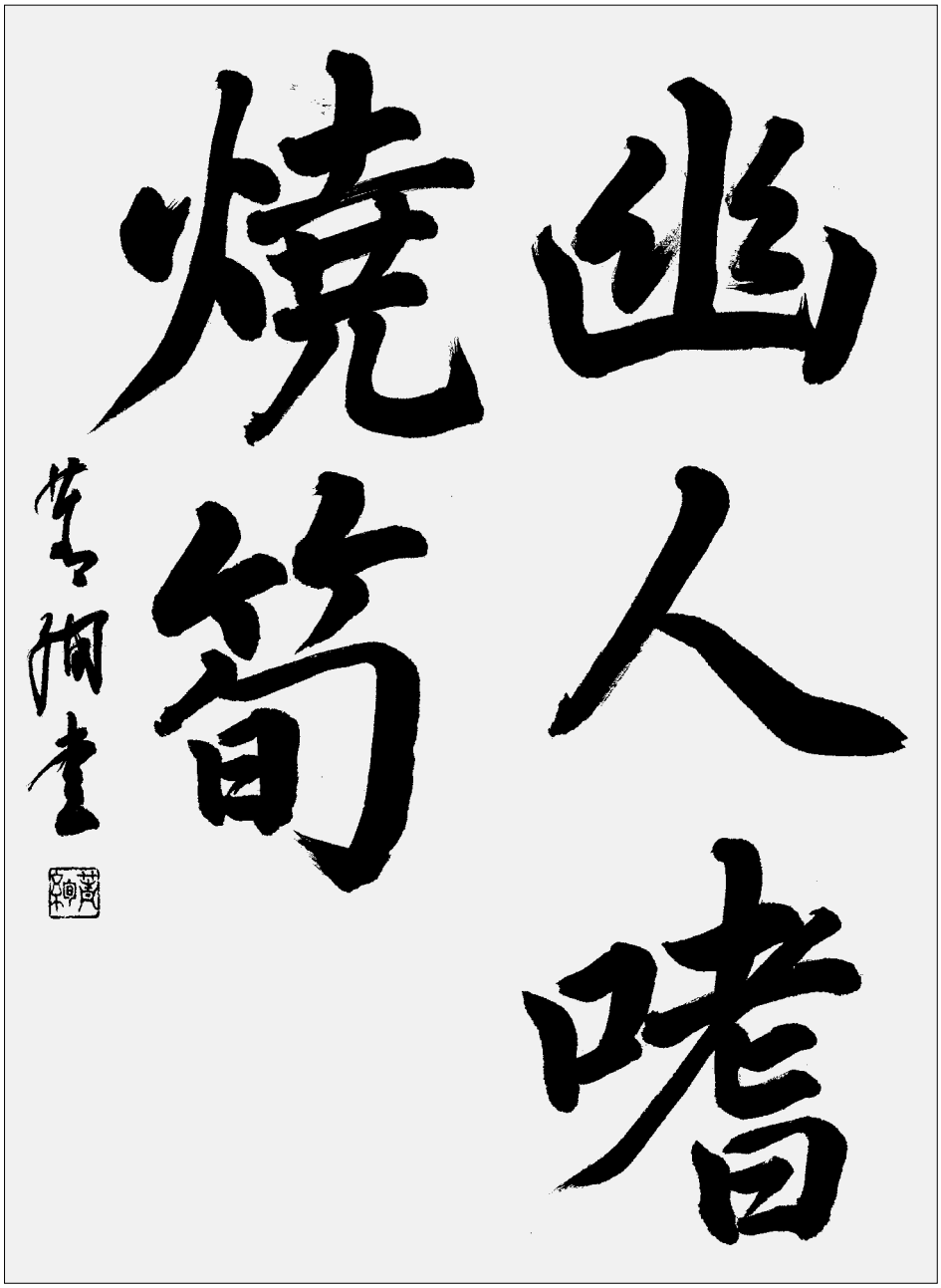
玄位～六位課題

幽人嗜燒筍　—高啓—

（幽人焼きし筍を嗜む）

風流人は焼いたたけのこが好きである。

参考手本　玄位～六位　横山菁絢書



幽—左右の縦画は内側に向けましょう。

人—一画めより二画めが下に。

嗜—旁の「老」と「日」の位置に注意しましょう。

燒—偏の左払いは暢びやかに。

筍—日は中心より左に寄せて書きましょう。

次号課題（予告）　47頁参照

五月八日締切

かな規定

半紙縦書

極位・準極位課題

静かなる　声をひさしくも
聞かざりき　野空にひびく
郭公のこゑ

（土岐善麿）

妙位～6位課題

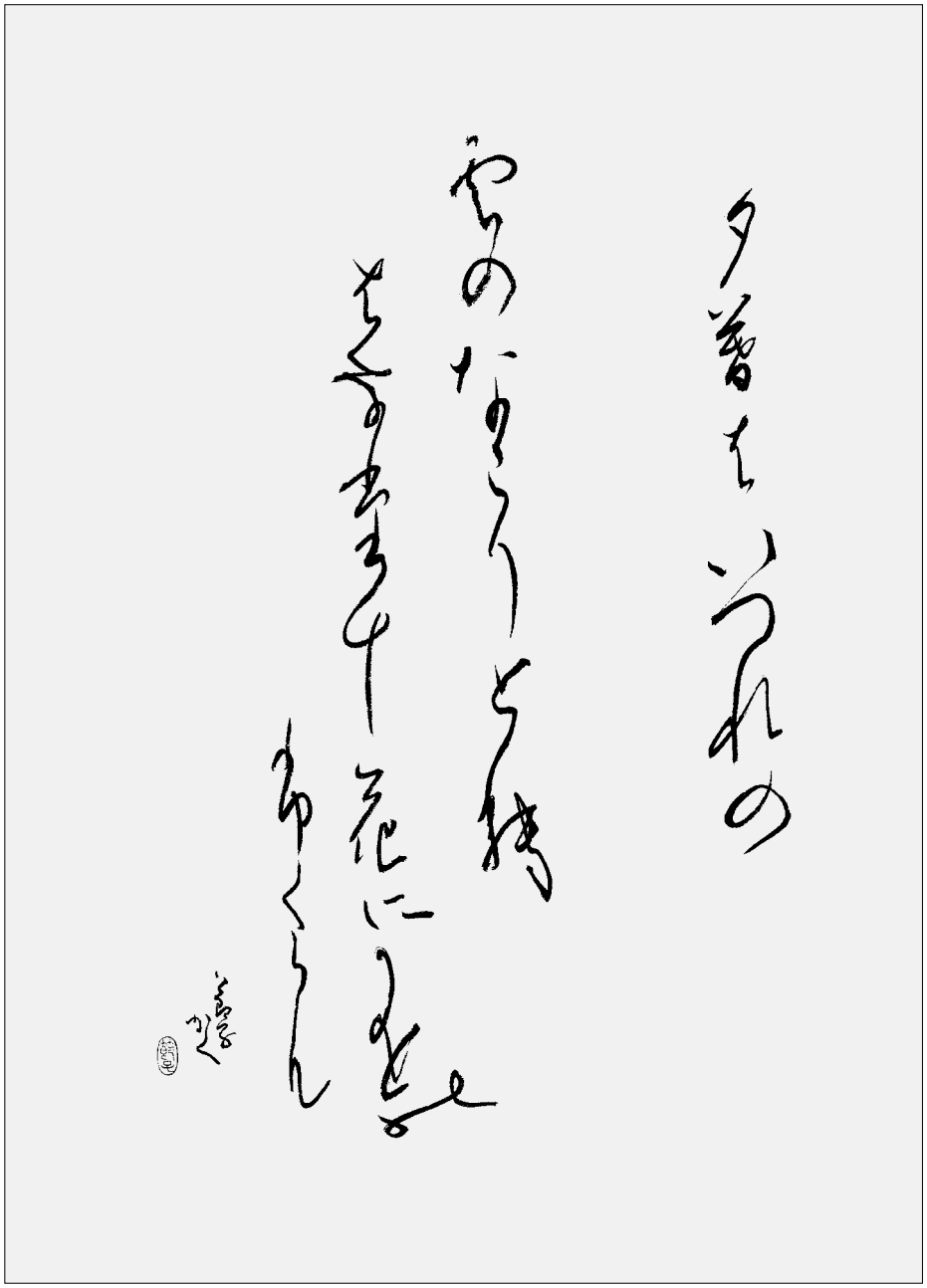
夕暮は　いづれの雲の　な
ごりとて　はなたち花に
風のふくらん

（藤原定家）

次号課題（予告）
47頁参照

※かな漢字相互の変換、ちらし自由。落款は○○かく＋印。

参考手本　妙位～6位　佐藤節子書



墨を半紙に沈めるようにゆっくりと書きました。

参考手本　大久保 楓 紅 画

—茶の花—

五月八日締切

南画規定

※横三五センチ、縦二七センチ（小画仙紙半切五分の一）の用紙を横に揮毫のこと。

南画初学講座（一三四）

大久保（おおくぼ） 楓（ふう） 紅（こう）

本講座は、これまで書壇誌に掲載された大久保楓紅先生（一九一九～二〇〇二）の作品を参考手本として転載しています。

今月は茶の花を描きます。

茶は、秋から初冬にかけて雪のような白い花を開かせます。ふっくらとした五枚の白い花弁に黄金色の雄しべがあります。大変に上品な美しい花です。

筆の順序は、先ず淡墨で花びらを五枚。次に蕾の輪郭をかき、葉は墨色をつけて一筆か二筆で手前の方から、枝をつけながら後へと、交互に考えながらバランスよく適当に描いてください。

最後に花びらは胡粉で、雄しべは黄色で彩色します。葉脈は墨で入れます。

讃は「茶令人爽」—茶は人をして爽ならしむ—です。

次号課題（予告）　47頁参照

五月八日締切

漢字臨書規定

小画仙紙半切・半紙縦書

参考資料 表紙内側

王羲之書―太常帖―

玉井菁雪

王羲之（三〇七？―三六五？）出身は琅邪臨沂（山東省）の人。字は逸少。官名により王右軍とも呼ばれます。在世年代は諸説ありますが、東晋王朝のひとです。

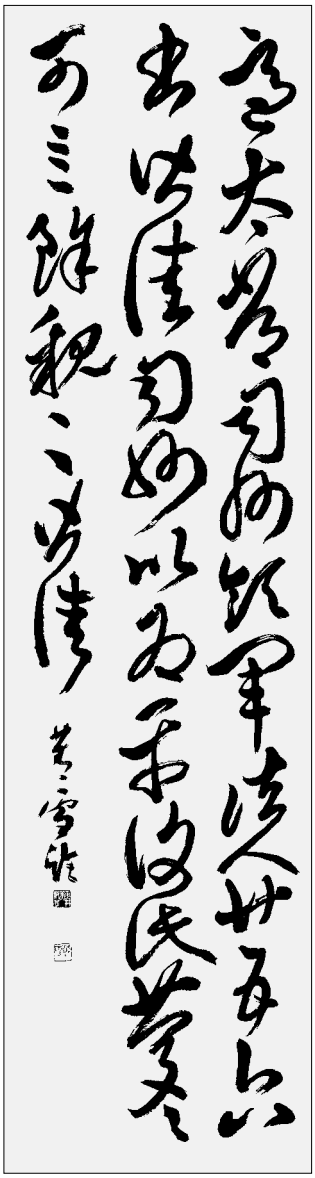
若くからその才能が期待され、政治の世界に登場します。良吏として多くの実績を積んで行きますが、権力闘争もあり、また自らの希望でもあり、晩年は右軍将軍、会稽内吏として地方へ転出します。

義之の書の名声は若くして既にあり、多くの書の逸話があります。また書の名品の数々はよく知られています。しかし真跡は一つもありません。全て再度写し直された模本によるものです。それでも長い書の歴史の中で、日本にも多大な影響を与えた王羲之書の功績は大きく、書聖といわれています。唐以降、歴代の書の大家は王羲之書に理想を求め、独自の書風を築き上げて行くことになります。

太常帖はとても精彩があり風韻のある帖です。実際の二字連綿は四ヶ所ですが、書く程に文字の終筆が次の字の始筆に空間で繋がっており、しかも振幅が大きい。運腕を大きく、じっくり書くことで基本に立ち返ったような気分でした。そして時折この気分を味わうことが重要であると痛感しました。

たまたま太常、司州、領軍（王羲之の従兄弟）諸人の二十五・六日の手紙を受け取ったところ、皆元気にしている。司州は病が良くなったそうで、これはとりわけめでたいことである。……

太常帖の課題三十一字は右のような内容の尺牘（手紙）の部分です。



玉井菁雪臨　半切参考手本（上位～六位）

桑山戯魚臨　半紙参考手本（上位～六位）

訂正　四月号中段七行目に誤りがありました。西狭頌全文で二九五字は「三八五字」に訂正いたします。

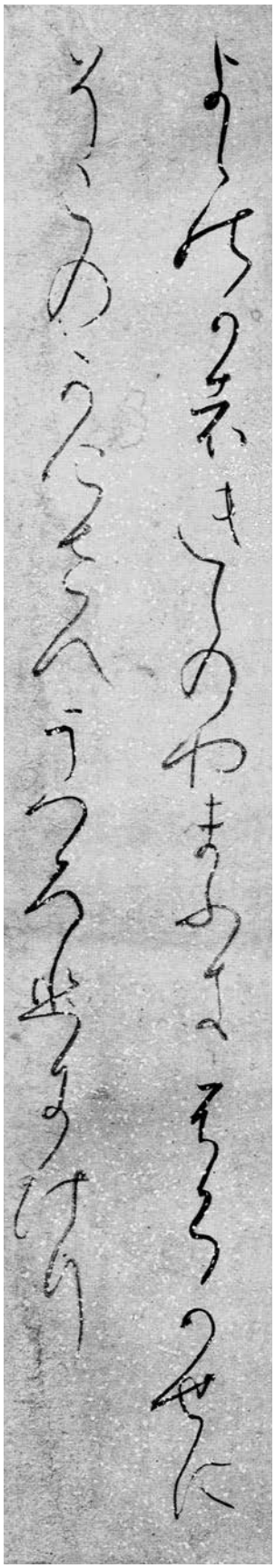
次号課題（予告）
48頁参照

五月八日締切　かな臨書規定　高野切第二種　―十七―　半紙縦半切

極位～2位

左を半紙縦半切に臨書すること

（二玄社　日本名筆選③）



よしのがは（能可者）　きしのやまぶき（支）　ふくかぜに（不可）　そこのかげさへ（曽可介）　うつろひにけり（悲尓）

『高野切第二種』の字形は概して正面向きで、やや狭長、大小の差も比較的少ないように感じられます。今月は、吉野川の岸の山吹は風に散ってしまったが、川底に映る花の影までが散ってしまったよ、と詠んだ、晩春の空しさを感じさせる貫之の叙景歌。抑揚のある豊かな線質と墨量の変化の妙が際立つ一首です。うねりを伴う連綿が多用されているので、十分目習いをし、何度も練習してから書きましょう。抑揚ある書き出し、多様な連綿線の細かい動きが鍵となります。

（星野静代）

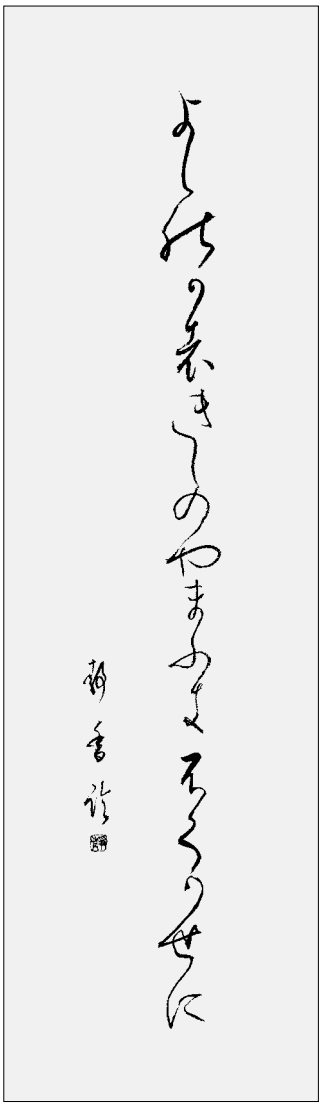
3位～6位

半紙縦半切に臨書すること

よしのがは（能可者）　きしのやまぶき（支）

ふくかぜに（不可）

3位～6位参考手本　松原（まつばら）　静香（せいこう）　臨



次号課題（予告）48頁参照

5月8日締切　日本文

①条幅規定　半切タテ　参考手本　中井言玉（なかいげんぎょく）書

ものさびし　青葉の宿の　五月雨に　室にかなへる　沙羅双樹（そうじゅ）の花　（伊藤左千夫）

日本文の作品はいつもホッとできるように仕上げたい、と思う。

②半紙規定　ヨコ

参考手本
鈴木啓佳（すずきけいか）書

窓明けて　蝶を見送る　野原かな
（小林一茶）

③半紙随意　書体・文言自由。半紙タテ

次号課題
（予告）
47頁参照

篆刻入門

（二五四）

鈴木青雨（すずきせいう）

五月八日締切課題

○規定「偶然欲書」

○随意（または摹刻を含む）

○印は3㎝以内、摹刻は原印大とします。

○51・52頁応募規定をご覧ください。

※出品票を貼ったバーコード券を必ず貼付してください。

《応募作品アドバイス》

今月の課題は「加餐」でした。二文字の印文で画数の多い字と少ない文字の組み合わせで疎密のバランスが取り易かったと思います。各々個性あふれる作品が集まりました。作品づくりに意欲的に取り組んでいる姿がうかがわれました。

規定

○流芳さん、「加」と「餐」と一体化させて一文字に見せて右下に大きく朱の部分を作った処理は作品効果を高め良い仕上がりとなりました。

○玄松さん、朱文印で大らかな空間処理をした印、力強さが表現されました。外側の枠の処理もバランス良く収まりました。

○蘭陽さん、手馴れた作品づくりで見事な出来ばえです。辺縁のバランスも効果的になされました。

○雲泉さん、印面一杯に印文を収めて印外にも印ありの風情があります。

随意

今月は摹刻印の出品がなく随意として一点の出品がありました。

○秀甡さん、「呉下阿蒙」の朱文印、丁寧に収めてあります。今後の印稿段階での作品づくりをお願いします。

堀　流芳

真田　玄松

柴　蘭陽

小林　雲泉

松本　秀甡

規定参考　鈴木青雨作

偶然欲書

摹刻参考

詔假司馬

偶然欲書（偶然書せんと欲す）ふと筆をとって書いてみようとする気持ちになる。

六月五日締切規定予告

「善氣迎人」